

女性の同胞意識 ギヤスケルが短編小説に描いた独身の女性たち

Single Women's Fellow-feeling in "Libbie Marsh's Three Eras," "The Well of Pen-Morpha," and "Half a Life-time Ago"

矢次綾

Aya Yatsugi

序

ギヤスケルが小説を描いた 19 世紀半ばは、女性の生き方が何かと取りざたされた時代であった。配偶者を得ることができず<余った>女性たちが否応なく職業を持ち、社会に進出していった。そんな事情を反映して、例えば Blackwood's Magazine は、1850 年代になって女性の家庭外労働や権利に関する記事を頻繁に掲載するようになる。その一方で、「女性は友情を育むことができるか」という論争がそれまでにない高まりを見せ、ブラックウッズ誌は表立って取り上げていないものの、各種雑誌でジャーナリストや小説家たちが論陣を張っている。

その中でも代表的な意見として、Nestor は Saturday Review が 1870 年代に掲載した "Friendship" と "The Exclusiveness of Women" という 2 つの記事を引用している。

The first claimed that female friendships were notoriously shallow, most often a "rehearsal" for "serious business" of relationships with men. Admitting the occasional "very real" friendships, the article claimed these could only occur when both women were "verging towards middle age, when neither [was] a wife or a mother, and when one [had] a stronger character than the other, so that they impact better together, and bring into their relations the charm of protection on the one side and of reliance on the other"--in effect, only when the relationship conformed to conventional heterosexual roles. The second article depicted women as possessive, competitive, and untrusting, "not ashamed to suspect their sisters of improper feelings", and it concluded, "you seldom see any sense of the community of sex." ¹

女性同士の関わりを二次的なものと見なし、偏狭さを女性特有の性格とするこのような見方は以前からあったと思われるが、この時代について目新しい点を挙げれば、「書く」能力を身に付けた女性たちが積極的に論争に参加したことである。その中には、Frances Power Cobbe (1822-1904)のように以上の見方に異論を唱える女性もいれば、Eliza Lynn Linton (1822-98) が匿名で行ったように同調する女性もいた。²

ギaskellはどちらの立場の女性たちとも広く交流し、その論争に積極的に参加しようとしなかったという。しかし、その小説を見渡すなら、産業革命後の変革の時代を描きながら女性の生き方について種々に考察し、<余った>女性の選択肢の一つとして、女性を同胞とすることを提示しているのが分かる。その代表として、Auerbach は Cranford (1851-53) における老嬢たちのコミュニティーを挙げ注目している。³

しかし、本稿では、クランフォードのように小説の冒頭から既に成立しているコミュニティーのあり方ではなく、女性が同性と共生する過程について、“Libbie Marsh's Three Eras” (1847. 以下「リビー・マーシュ」) “The Well of Pen-Morfa” (1850. 以下「ペン・モーファ」) そして “Half a Life-time Ago” (1855. 以下「半生」) に登場する、独身のヒロインやその同胞を通して考察したい。⁴ このヒロインたち各々の事情の中に、結婚できずに<余った>女性に寄せる、ギaskellの女性観や家庭観も描き込まれているからである。

「リビー・マーシュ」は、マンチェスターのお針子リビーをヒロインとする小説である。Unsworth によれば、ギaskellはマンチェスターで様々な社会階層の女性と接してトラウマ的な影響を受け、中でも労働者階級の女性たちの現状に憤然とすると同時に悲しんだという。⁵ それは主に、彼女たちの生活環境や労働条件など物理的な側面についてであろうと推測されるが、「リビー・マーシュ」では、都会が独身女性にあたえる心理的影響 (= 孤独感) に着目し、やむを得ず<余った>女性たちに、他人のために尽力することに生き甲斐を見出すよう提案している。

リビーが最初に尽力する相手は、肢体不自由の少年 Franky Hall である。「リビー・マーシュ」は彼女にとって重要な1年を、フランキーとの出会いが書かれている第1の時代 (ヴァレンタインの日) Duham への遠足についての第2の時代 (精霊降臨節) フラン

キー死後の第3の時代(聖ミカエル祭)の3つに分けている。これら3つの時代について、Easson は「フランキーの短い生涯における諸段階であり、自己憐憫の涙を流していたリビーが他人との関わりを通じて幸福をつかむ諸段階」⁶ と指摘しているが、ここでは、精霊降臨節の前と後とで、特に結婚に関してリビーの気持ちに変化が見られること、従ってギaskellのリビーへの対応に違いが生じることに注目したい。

第1の時代において、結婚はリビーにとって非現実的な夢である。その背景的な理由は、容貌に頓着する傾向があるマンチェスターで、不器量な自分は相手を見つけることができないと彼女が信じていることである。この時点のリビーはまた、両親の結婚生活を通じて少女時代から知っていたはずなのに、結婚の持つ負の側面に思いが至っていない。結婚を孤独から抜け出す唯一の策と考えている節もあり、ギaskellはこれを、リビーの結婚願望と諦念の両方について、彼女が独り物思いに耽り涙を流している文脈の中で言及することを通じて暗示している(168-69)。そして、自発的な行動が取れないリビーに、ディケンズが描く都会のロマンスを思わせる文脈を用意し、聖書のメタファーを用いながらフランキーをひき合わせ、孤独を克服するきっかけをあたえる。リビーが唯一の持ち物である「ノアの方舟」型の収納箱を揺らしながら、自分は大地を求めて「方舟」で大海をさ迷っているだけなのだ、おそらく想像しているところで、オリーブの枝をくわえたハトよろしくフランキーをその視界に入れる(169-70)。

第3の時代でギaskellはフランキーの葬儀と平行して、家主の長女 Anne Dixon の結婚話を導入し、リビーに結婚や家庭の意味を問いただす。フランキーへの献身によって孤独感を克服したリビーは、アンが飲酒癖のある男と短慮な結婚を目前にしているのを見て、同様に飲酒癖のある夫のために母が強いられた苦労や、泥酔した父の暴力による弟の死について初めて思いを巡らす。そして、間近に迫った結婚の危険性をアンに解らせようとしたところで、逆上したアンに「あんたは一生結婚なんかできない、生まれながらのオールド・ミスよ!」と罵倒される。それが直接の契機となり、結婚と自分の生き方について次の結論を下すのである。

[. . .] I know I'm never likely to have a home of my own, or a husband that would look to me to make all straight, or children to watch over or care for, all which I take to be woman's natural work, I must not lose time in fretting and fidgetting after marriage, but just look about me for somewhat else to do. I can see many a one

misses it in this. They will hanker after what is ne'er likely to be theirs, instead of facing it out, and settling down to be old maids; and, as old maids, just looking round for the odd jobs God leaves in the world for such as old maids to do. There's plenty of such work, and there's the blessing of God on them as does it. (189)

リビーの出した結論は取りも直さずギaskellの結婚観や家庭観であり、<余った>女性に寄せる生き方のヒントと言える。リビーが家庭を持つことを女性生来の仕事と見なしながら、結婚の持ち得る負の側面を認識しているように、ギaskellも妻として母としての役割を最も優先すべきだと考えると同時に、結婚について感傷を廃した現実的な見方をしている。すなわち、親友の Elizabeth Fox宛ての手紙の中で、ギaskellは、家庭人としての義務を果たすためなら、個人的な志向は二の次と考えるべきだと主張する一方で、⁷ 多感な少女時代を共に過ごした叔母の Hannah Lumb (1768-1837) の経験に影響され、場合によっては結婚を解消するのをもいた仕方ないと考えていた。ラム叔母は結婚後に夫の精神異常に気付き、自ら離婚を申し出ている。その後のラム叔母は、リビーの言う、神からあたえられた<余り>の義務を果たさんとするかのように、地域に住まう女性たちの福利厚生のために尽くし、例えば、男性に虐げられた女性のために女性慈善協会を設立している。⁸

「ペン・モーファ」の語り手は、ヒロインの Nest Gwynn の物語を始める前に、彼女と同じく美貌の誉れ高い娘が奉公先のロンドンで子供を宿して帰郷し、その後出産した肢体不自由の子供を抱えて苦勞する話を導入し(124-25)、ネストの運命を予示しながら、この短編が裏切られた女の母性愛を扱うことを示唆している。⁹ なお、Lansburyによれば、母性愛についてもギaskellの見方に感傷主義は見られない。

Throughout her life, Elizabeth Gaskell was to maintain that maternal love is not the attribute of every mother, that a woman may give birth to a child that she detests, and that it is possible for the love the love of parent and child to be established between strangers or distant relations. ¹⁰

この見方を裏付けるかのように、ギヤスケルは、破談の憂き目に会ったネストが我が子を持たないことを悲嘆しながら(135) その実、母性愛について理解していないことを明らかにする。そして、白痴の Mary Williams を子供として受け入れ献身することによって、母性愛について学ぶ様を描いている。

ネストが母性愛について無知であったと悟るのは、母親 Eleanor の死に際し、メソジスト派の説教師 David Hughes の導きに遭うときである。自分を愛してくれる母親が逝ってしまったと嘆くネストに、ヒューズは「自ら愛し始めよ」と説く。ネストはそれに反発し、負傷する以前に自分がいかに愛情深かったかを語ろうとするが、そのうちに、自分の内面的な変化が愛し裏切られたことではなく、自分自身に対する憐憫の情によってもたらされたことを悟るのである。

“[. . .] Of late (since I loved, old man), I have been cruel in my thoughts to every one. I have turned away from tenderness with bitter indifference. Listen!” she spoke in a hoarse whisper. “I will own it. I have spoken hardly to her,” pointing towards the corpse,--“her who was ever patient, and full of love for me. She did not know,” she muttered, “she is gone to the grave without knowing how I loved her--I had such strange, mad, stubborn pride in me.” (138)

ネストの言う “such strange, mad, stubborn pride in me” が災いして彼女は自分自身を憐れみ、母の愛を理解できなかった。しかし、母の自分への愛が裏切りや自己憐憫とは無縁の愛、ヒューズの言葉を借りるなら「自我を廃し、見返りを求めないキリストの愛」であるとの認識に至る。同時に、母親の愛情に応えなかった自責の念を強くする。

ネストが残りの人生をかけて行すべきは、母と同じ愛で誰かを愛することによって、母の愛に報いることである。ヒューズの「病の者、疲弊した者を心から受け入れ、愛せよ」という言葉を手がかりにして、ネストは、後見人の暴力から逃れエリナーの死を知らずに避難所を求めに来たメアリを、母がしていたようにやさしく迎え、共生の手続きを取る(139-40)。そうすることによって、ネストはメアリにとってエリナーと同じ保護者となり、ネストにとって精神を病んだメアリは、かつて母に愛された心身共に傷ついた自分自身と重なる。従って、ネストはメアリを自分と同一視しながら母と同じやり方でメアリを

愛し、自責の念を和らげる。そして、致命的な傷を得た泉で安らかな死を迎えることができるのである。

ネストがワーズワス的な白痴への感傷からメアリを受け入れたとは思にくい。「」で言及したラム叔母の影響などから、ギヤスケルは白痴についても現実的な考えを抱いていたと想定されるからである。ランズベリーが指摘しているように、「半生」では白痴が家庭を破壊する可能性さえ描いている。¹¹ よってネストとメアリはあくまで対等な同胞同士であり、ギヤスケルが語り手の口を借りて言うには、献身的なネストをメアリは「動物が盲目の主人を愛するように愛し返した」(141)。この言葉は、「動物」のメアリと「盲目」のネストは不完全であるという共通点を持ち、互いに互いの不足を補う相互依存の関係を形成していることを示唆していると言えよう。

「半生」で印象的なのは、ギヤスケルがヒロイン、Susan Dixon の情念に主眼を置き、破局した彼女の苦しみを母親になれないことではなく、かつての恋人 Michael Hurst への思慕の情を抑えきれないこととしている点である。これは原形となった “Martha Preston”¹² からの主な変更点でもある。¹³ 「マーサ・プレストン」の同名のヒロインは破局した唯一の不幸を、我が子を持たないことと嘆くが(137)、偶然からかつての恋人の息子の命を救い、そのゴッド・マザー的な役割を担うようになり、子供がいないことによる心の空洞を満たしていく。確かにスーザンも、時計のチックタックという音を母と子の語らいに喩えて、家庭には母親と子供の両方が不可欠との認識を示しながら、子供のいない人生の虚しさを暗示する(95)。そして最終的にマイケルの妻エリナーとその子供たちを農場に迎え、不幸に取り付かれた炉辺(=家庭)に活気を呼び込むが(102)、それは、エリナーと互いの情念を衝突させ和解に達した後に過ぎない。

ギヤスケルは「半生」の最初の4章で、バラ色の頬の少女スーザンが雄々しい女地主になる背景として、白痴の弟 Willy への献身に加えて、激しい情念を無理に抑制したことを挙げている。スーザンは破局した直後、空想の中で幸福だった頃の甘美な思い出に浸ることによって自分自身を慰めるが(89)、心を健康な状態に戻すためと自分に言い聞かせてマイケルの姿を盗み見に行った後は農場と弟の世話に没頭する(90-92)。そして、その情念を、ウィリー亡き後の最終章でマイケルの凍死体を愛撫するようにやさしく抱きその死

からしばし目を逸らす場面と(98)、マイケルの死を知らせるために訪れたハースト家でエリナーと対面する場面まで抑制し続けているのである。

ハースト家を訪れる場面で、最初は感情を抑えていたスーザンだが、エリナーの夫への愛情を思い知らされると、突如として「私が彼の代わりに死ねばよかった」(101)とマイケルへの想いの丈を吐露する。そして、言い終えた途端に卒中の発作を起こして黙り込み、奇妙な動きでエリナーまでも沈黙させてしまう。ここで思い出されるのは、ギヤスケルの主に長編小説のヒロインの病についての木村晶子氏の指摘である。木村氏はヒロインたちの病が「ある限度を超えた精神的負担や悲しみに対する肉体の言葉であり、肉体的苦痛の極点である一方で、逆に言葉にできなかった精神的な苦痛からの解放」であると述べている。¹⁴ もっとも、この場面では、発作を起こしたスーザンだけでなくエリナーまでもが、病を通じて苦痛から解放される。発作が起きる以前の2人は互いの言葉に挑発されながら、死んだマイケルを悼むのではなく独占しようとしていた。しかし、発作によって2人は嫉妬という激情から解き放たれる。それと同時にマイケルを失った悲しみを共有し、マイケルを愛した者同士として友情を育む契機を得るのである。

女性が友情を育てられない原因として、しばしば挙げられるのが嫉妬深さであろう。リントンも女性の嫉妬深さが男性の想像を絶すると述べているが、ネスターはギヤスケルが男性も女性も恋愛感情から嫉妬心を抱き得ると考えていたと指摘した上で、*Silvia's Lovers* (1863)を例に挙げながら、ギヤスケルの描く女性の嫉妬が男性のそれよりも破壊的要素が少ないと述べている。¹⁵ もっとも、スーザンとエリナーの場合、互いが持っていた嫉妬心そのものは、リントンが言う程度に激しいのかもしれない。しかし、エリナーが発作を起こしたスーザンを、夫を想って涙を流しながらも姉にするように懸命に看病する姿や、農場を管理する術を知らないエリナーをスーザンが迎え入れる姿を描きながら、ギヤスケルは、女性の同性に対する思いやりが嫉妬心を凌駕する可能性を示し、女性の友情そのものを強く肯定していると考えられる。

結

以上、「リビー・マーシュ」、「ペン・モーファ」、「半生」におけるヒロインとその同胞を通して、ギヤスケルが女性の友情をいかに描いているかに加えて、その結婚観、母性愛や女の情念をどう見ているかを考察してきた。さらに付け加えるとすれば、ギヤスケルが家

族のあり方について、柔軟な考えを持っていたということであろう。というのも、この3編のヒロインとその同胞はただ友情を育むに止まらず、男性のいない家族を形成していると考えられるからである。それを象徴するのが、「半生」の語り手による、スーザンがエリナーと子供たちを迎えることによって「炉辺を生氣でいっぱいにした」(102)という言葉である。また、ギaskell自身が少女時代にラム叔母と男性のいない家庭を形成していたことも背景として挙げられるだろう。もちろん、「」でリビーの言葉を引用しながら指摘したように、ギaskellは男性の存在を否定しているわけではない。女性が<余った>時代に、配偶者としての男性がいなくても、女性には家庭を持つ可能性がある」と主張していると考えべきである。

ギaskellがそれを主張しているのは、ここで取り上げた3編や「序」で言及した『クランフォード』においてだけではない。“The Grey Woman”(1861)で召使いの Amante は、ヒロインの Anna Scherer を守るために男装しアンナの夫を装って生活するが、アマンテの女主人を思う気持ちは母親の娘に対するそれにも喩えられる。実際に、ギaskellの描く女性の召使いたちの多くは女主人にとって母親的な人生の導き手であって、ユーグロウはこのような役割を果たす召使いとして、Ruth(1853)の Sally や、Cousin Phillis(1863-64)の Betty の名を挙げている。¹⁶ 『従妹フィリス』の当初予定していた結末でギaskellは、独身のヒロインが農村共同体という大家族で母親役を演じる姿さえ描いている。すなわち、Phillis Holman は牧師の父親とかつて愛した鉄道技師の William Holdsworth から伝授された技術を用いて治水工事をしながら、その傍らに2人の子供を連れている。この子供たちはその地域を襲った熱病で親を亡くした孤児で、フィリスが養子にし母親役を買って出たのである。¹⁷ これらの独身の女性たちはすべて、言わば変則的な家庭の中で各々の役割を果たしている。

註

* 本稿は、日本ギaskell協会第14回大会(2002年10月6日、大手前大学)において口頭発表した原稿に加筆修正を施したものである。

1 Pauline Nestor, *Female Friendships and Communities: Charlotte Brontë, George Eliot, Elizabeth Gaskell* (Oxford: Clarendon, 1985) 12.

- 2 Nestor 13.
- 3 Nina Auerbach. *Communities of Woman: An Idea in Fiction* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1998) 78-97. もっとも、Coral Lansbury は *Elizabeth Gaskell: The Novel of Social Crisis* (London: Elek, 1975) 87-93 において、克蘭フォードをコミュニティーというよりもむしろ老嬢たちの家庭と見なしている。ネスターはランズベリーに賛同し、いずれにしろ『克蘭フォード』は、ギaskellの描く女性の友情やコミュニティーのあり方の一例に過ぎないと付け加えている。(Nestor 49)
- 4 “Libbie Marsh's Three Eras,” *A Dark Night's Work and Other Stories* (Oxford: Oxford UP, 1992) 167-93. “Well of Pen-Morfa,” *The Moorland Cottage and Other Stories* (Oxford: Oxford UP, 1995) 123-143. “Half a Life-time Ago,” *Cousin Phillis and Other Stories* (Oxford: Oxford UP, 1981) 59-102. この3編について本稿で言及するページ数は以上の版による。
- 5 Anna Unsworth, *Elizabeth Gaskell: An Independent Woman* (London: Minerva Press, 1996) 215-16. アンズワースは、ギaskellが有閑階級の女性たちに侮蔑的な態度を取り、中流階級の貧しい女性たちには支援団体の一員として援助の手を差し伸べたと付け加えている。
- 6 Angus Easson, *Elizabeth Gaskell* (London: Routledge, 1979) 203.
- 7 *The Letters of Elizabeth Gaskell*, eds. John A. V. Chapple and Arthur Pollard (1966; Manchester; Manchester-Mandolin, 1997) 69.
- 8 ラム叔母の離婚の経緯は、Jenny Uglow (*Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories* [London: Faber and Faber, 1993] 12、Lansbury 15 を参照。地域貢献については、足立万寿子「『仕事と家庭』の両立 エリザベス・ギaskellの場合」(ギaskell論集 11 [2001] 7-21) 11 を参照。
- 9 イーソンはこの導入話をネストの物語の“an image”、すなわち「裏切られた後に、一見報われない仕事に最大限の愛情を注ぐ女性」の象と見なしている。(Easson 209) イーソンの言う「一見報われない仕事」をここでは母性愛を巡る試練と考えたい。
- 10 Lansbury 16.
- 11 Lansbury 9.
- 12 “Martha Preston,” (*Sartain's Union Magazine*, vi, 1850) 133-38. 本稿で言及するページ数はこの版による。

- 13 「半生」が「マーサ・プレストン」を原形としていることについては、J. G. Sharps 著 Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works (Fontwell, Suss.: Linden, 1970) 87-92 及び 243-48 を参照。
- 14 木村晶子「ギaskellのヒロインと病い」(ギaskell論集6 [1996] 63-64) 69。
- 15 Nestor 66.
- 16 Uglow 264.
- 17 『従妹フィリス』の予定されていた結末については、Further Letters of Mrs Gaskell, eds. John A. V. Chapple and Alan Shelston (Manchester: Manchester UP, 2000) 259-60、その解釈については、矢次「『従妹フィリス』: 新旧の価値の出会いとヒロインの自立』ギaskellの文学 ヴィクトリア朝社会を多面的に照射する 〔松岡光治編、英宝社、2000年〕215-16 を参照。